

主日礼拝

礼拝6月19日（日）

題 『生き生きとした希望』

テキスト：ペトロの手紙一 1章1～9節

おはようございます。

今回からしばらくはペトロの手紙を学びたいと思います。

聖書を輪読していれば定期的に読むことになりますが、そうでもないかぎり新約聖書の中でもあまり読むことのない個所ではないでしょうか。

また教会の説教でも福音書やパウロの書いた手紙よりも、わたし自身もそうですが、取り上げ方は少ないように思います。

しかし、そのことは決してこの手紙の価値が低いということではないのです。この手紙にも神さまからの宝の言葉、命のことばが隠され、ちりばめられているのです。

このペトロの手紙Ⅰ、そして続くペトロの手紙Ⅱは、古くからイエスの弟子の一人であるペトロが書いた手紙だと言われていますが、最近の聖書学の研究者の中では、書かれた年代がペトロより新しく、著者はペトロ自身ではなく、ペトロに影響を受けた人が、ペトロの名によって初期のキリスト教会の信徒たちを励ますために記したのではないとも言われています。古代の手紙ではよくあったことだと言われています。

わたしも以前、牧師として苦難の中にあった時、このペトロの手紙のことばに出会い、強く深い慰めと励ましを受けたことがあります。神さまは、聖書の言葉を通して、わたしに牧師としての再生の道を備えてくださったのだと信じているのです。そして今洲本教会に遣わされています。不思議なる主の導きと信じ、そのことを感謝しています。

洲本教会に赴任して知ったことの一つは、洲本教会と関わりの深い天に召された島田和人先生のことばは、長く洲本教会と関わっておられる方々にご存知ですが、

礼拝で用いられている新共同訳聖書の編集委員でもある島田和人先生は、このペトロの手紙の日本を代表される研究者で、アメリカの大学に留学中に英語で書かれた研究論文は、欧米の新約聖書研究でも評価が高く、今でも学者たちのペトロの手紙研究の貴重な資料として必ず用いられていることを、日本の聖書学関係の文書で知りました。聖書の学問的な研究とキリスト教信仰は究極的には矛盾しないことを教わる思いになり一牧師として感謝しています。わたしたちもこれからしばらく間、少し難しく思えることもありますが、このペトロの

手紙を通して、神さまのことばを学び、恵みを頂き、救いの確信と生きる希望を得たいと願っています。

さて、ペトロの手紙は、ⅠそしてⅡからなっています。
まず挨拶から始まっています。

◆挨拶

1:イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ。」とあります。聖書の後ろのページに地図がありますが、この地域は、今で言えば、トルコの地になります。
ここに名前のあるカパドキアは、昔、わたしも訪問する機会が与えられたのですが、キノコのような形をした奇妙な岩がいっぱいあり、今では世界遺産にもなり世界的に有名で多くの観光客が訪れています。そこにはかつてキリスト者たちがローマ帝国の迫害を逃れ隠れた地下都市の跡が今でも残っています。まさに追われるように故郷を離れなければならず「離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ。」と手紙の著者は、心配し、神の助けを信じ祈り、思いを込めて語りかけているのです。この地に生きる人々へのペトロの熱い思いをこの手紙から感じます。
この手紙は、今を生きているわたしたち一人一人に対しても語られていると受けとめたいのです。

「2:あなたがたは、父である神があらかじめ立てられた御計画に基づいて、“霊”によって聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血を注ぎかけていただくために選ばれたのです。」信徒たちは、わたしたちもそうなのですが、実は世界を創造された雄大で愛なる神さまの大きな計画によって立てられているということです。神さまのいのちの息である“霊”によって聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血を注ぎかけていただくために選ばれたのです。わたしたちも、多くの場合、人との出会いを通して、神の導きで教会に招かれ、つながっているのではないのでしょうか。

「その血を注ぎかけていただくため」とは、少し難しく思いますが、イエス・キリストの十字架の愛の血潮を表していると思えます。イエスの愛を受け、イエスと共に生きるためにと理解しています。また、この文は、初代教会の洗礼式の時にも読まれていたようです。

今日の個所では、「生き生きとした希望」について語られています。

「3:わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、」とあります。「生き生きとした希望」とは、単に感覚的な感情の高まる瞬間を一時的に経験することではなく、現実にはたとえ困難はあったとしても神さまの守りと導きの中で、無くなることのない希望のことです。そして希望の力は一人一人に新しい生き方をもたらす力であり、それが生き生きとした希望なのです。何より信仰者の希望は、神とイエス・キリストを土台とちているのです。また「新たに生まれさせ、」とは、わたしたち人間は、肉体においてはすでに生まれてはいますが、神さまの命の息である霊によって、聖霊と言われますが、この世で新たにされ、あたかも生まれ変わったかのようになっていくのです。「新生」と言われます。愛なる神さまが主イエスの十字架と復活によって与えてくださった希望なのです。この希望によって、たとえ迫害や苦しみの中にあっても忍耐し喜ぶことができるようにしてもらえるのです。その姿は、開かれた空を見上げて生きる姿のようにわたしには思えるのです。

ところで希望の内容とはどのようなもののでしょうか？
ここでは「財産」という言葉で説明されています。わたしたちは、この世で生きている限り、どうしてもこの世の生活で、目に見え、手で触ることのできるお金が気になり、無くては困窮し、あっても心を煩わすことが多いのではないのでしょうか。時に喜ぶこともあります、しばしば不安にもなります。心が暗く憂鬱になることもあります。

さて「4:また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。」とあります。

「天に蓄えられている」、これは神さまが見守ってくださっているということだといわれます。「朽ちず」とは、たとえ死の力でも崩れることはないということです。また「汚れず」とは、濁った罪の渦巻きに汚されることなく、清さを保つことです。そして「しぼまない」とは、時の経過によって失われることがないことです。「しぼまない」との言葉は、不凋花（ふちょうか）という永久に色があせず凋（しぼ）まないという想像上の花「アマラントス」、不死の象徴の花を示していると言われます。神さまが行く手を守り導いてくださると思えるならどれほど安心できるのでしょうか。

この世の財産は、蓄えられたり、減って行ったりします。通常の状態であれば安定もしていても、現在のように社会や世界が戦争などで不安定になる

と、過去の日本でも起こったように、貨幣価値が極端に下がってしまうこともあります。

イエスさまは、ご自身愛する弟子たちに「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」と言われ励まされました。人間の罪と死の現実、最大の苦難だと思います。しかし、主イエスは十字架と復活によって罪と死に勝利されたのです。

神さまと主イエスは、苦しみの中で、求める者には、自分にすぎる者には、道なき所に道ができるかのようにです。神は必ず見えざる手をさしのべて救ってくださるのです。主イエスの手は神さまの救いの手であり、どこにでも届くのです。なぜならイエスさまは、十字架に死んで、まっ暗闇の黄泉にまで、つまり地獄にまで降ってくださったからです。そしてよみがえって、天に昇られました。そしてやがて世界と宇宙を完成させる終わりの時に、それはいつのことが人間が決めることできませんが、その時は決して恐怖の時ではなく、光に包まれる時だと信じます。喜びの時であり、神の栄光が現れる時、救いの完成の時なのです。

ですから、わたしたちもイエスにすがり、神を求め続けましょう！
これからも試練に悩むこともあるでしょうが、やがてイエス・キリストが現れるときには、ほめて頂けることを願い信じて、これからも愛なるイエス・キリストにつながり、主の教会や家族、地域での人と人との関係を大切にして生きて行きたいと願います。

主の平安を祈ります。